One day, a prince named Sion was hunting in a forest with his servants.

"Hmm? What's that? Someone is singing."

Suddenly, Sion heard a faint singing voice.

"Prince Sion, I've heard a rumor that there is a tower in this forest, where a fearsome witch lives."

"It's dangerous. We should go back."

"...No, I'll stay here. I can't get that voice out of my head. You go back to the castle first."

"Wait, Prince Sion!"

Sion left his servants there and went alone deep into the forest to find the owner of that singing voice.

After having roamed in the forest in pursuit of the voice, he found an old big tower.

"Oh, so I suppose this is the tower my servants were talking about. The tower where the witch lives."

It seemed the singing was coming from the big window on top of the tower.

Although Sion searched around the tower, there was no entrance anywhere.

"This is strange. How can I get inside? Ah, what beautiful singing. I wonder whose singing that is."

Since then, Sion has visited the tower every day, being fascinated by that beautiful singing voice.

あるひ、『シオン』という　なまえの　おうじが、
すうにんの　けらいたちと　ともに、
もりで　かりを　していました。

「ん？なんだ　これは・・だれかが　うたを　うたっている」

ふと　シオンの　みみに、
かすかな　うたごえが　きこえてきました。

「シオンさま、このもりには、おそろしい　まじょの　すむ
とうが　あるという　うわさを　きいたことが　あります」
「きけんです。もう　かえりましょう」
「・・いや、わたしは　ここに　のこる。
このうたごえが　どうも　きになるのだ。
おまえたちは　さきに　しろに　もどっていろ」
「おまちください、シオンさまー！」

シオンは　けらいたちを　おいて、
そのうたごえの　ぬしを　さがしに、
ひとりで　もりの　おくへ　はいっていきました。

うたごえを　たよりに　もりの　なかを　さまよっていると、
やがて　シオンは　おおきな　ふるい　とうを　みつけました。

「けらいたちの　いっていた　とおりだ。
ここが　まじょの　すむ　とうなのか？」

どうやら　うたごえは、とうの　うえに　ある、
おおきな　まどの　なかから　きこえているようです。

シオンは　とうの　まわりを　さぐってみましたが、
ふしぎなことに、どこにも　いりぐちらしき　ものが
ありませんでした。

「おかしいな。どうやって、なかに　はいれば　よいのだ。
ああ、それにしても　うつくしい　うたごえだ。
このこえの　ぬしは、いったい　だれなんだ」

それから　まいにち、シオンは　とうの　したへと
あしをはこび、その　うつくしい　うたごえに
ききいっていました。